



Rainbow letter

2021.6
No. 24

日本周産期メンタルヘルス学会・ニュースレター

診療ガイド紹介

2021年4月、日本精神神経学会と日本産科婦人科学会の両学会が協働で作成した「精神疾患を合併した、或いは合併の可能性のある妊産婦の診療ガイド各論編」が公開されました。2020年6月に公開された総論編では、プレコンセプションケア、周産期うつ病に対するエジンバラ産後うつ病自己評価票（EPDS）の使用方法、精神症状を呈した妊産婦への対応、自殺念慮のある妊産婦への対応、精神科医に知ってほしい妊娠・出産の知識についてまとめられ、妊産婦のメンタルヘルスに取り組む際の基本となる知識が集約されています。

今回の各論編は、うつ病、双極性障害、統合失調症、不安症・強迫症、摂食障害、アルコール・薬物依存、パーソナリティ障害、神経発達症、てんかん、睡眠・覚醒障害、ボンディングとその形成不全、妊娠と向精神薬、医療・保健・福祉の連携（アウトリーチ、精神科救急との連携）の全13章から構成されています。各精神疾患の妊娠・出産に伴う変化や、薬物療法や心理的介入、精神科と産婦人科の連携や多職種連携について、詳細に記載されています。各章の冒頭には要約が記載されており読みやすい構成になっています。

本ガイドは、作成過程において、各章ごとに精神科と産婦人科の複数の執筆者が共同で執筆しているというのが特徴です。両科の執筆者が互いの視点で推敲を重ねています。精神疾患合併または既往歴のある女性に対するケアにおいて、両科はもちろんのこと、医療・保健・福祉の領域で互いに共通の認識を持ち、連携していくための必携のガイドとなるでしょう。なお、本ガイドは日本精神神経学会HP（<https://www.jspn.or.jp/>）および日本産科婦人科学会HP（<http://www.jsog.or.jp/>）にて公開されています。ぜひご参照下さい。

（評議員・情報関連委員/菊地紗耶/東北大学病院精神科）



↑ 日本精神神経学会ホームページ

<連載企画> 私たちのまちのメンタルヘルスケア活動 ③

大阪医科薬科大学病院における周産期メンタルヘルス支援

宮田郁（大阪医科薬科大学病院看護部/信州大学大学院総合医理工学研究科博士課程）

当院は、地域周産期母子医療センターであり、有床の精神科が設置されていることから、様々な心身のハイリスク妊産婦が紹介されてきます。2011年度よりリエゾン領域の精神看護専門看護師（以下リエゾナーズ）が周産期領域に関わることになり、精神科・産科・地域連携室と一緒に周産期メンタルヘルスに関連するシステムを構築してきました。そのコンセプトはメンタル支援の必要なママに伴走することです。そのシステムは『産科領域として安心・安全な分娩とママになる準備を支援する柱』、『精神科領域として精神症状のコントロール、精神疾患にかかわらず妊娠・出産を機にメンタルに不調を来したママを診（看）て少しでも精神的な安定を維持できるように支援する柱』、『薬剤部として妊産婦が服用している向精神薬の情報をケースレポートに至るまで調べて情報提供したり、妊娠と薬情報センターとして地域の精神科や産科クリニックに通うママへの情報提供を行い、安心できる薬物治療の継続を支援する柱』、『地域関連機関による安心・安全な育児環境のための社会資源の提供する支援の柱』の4本柱と、その柱の間をリエゾナーズとMSWがタッグを組んで顔が見える関係性を紡ぎながら連携を図るというものです。



↑ メンバーによる打ち合わせのひとこま

また、リエゾナーズは、独自にペリネイタルロスのグリーフケア外来を担当し、不妊、母性内科、出生前診断、プレコンセプションケア、小児科の移行期という様々な周産期の場面に関わっており、そこで専門家の支援が必要だと判断した場合は、当院の精神科や当院出身の医師が開業している精神科クリニックに相談しています。どのような相談にも柔軟に対応してもらえる精神科は当院の特徴であるともいえます。そして、2021年4月より新たに、「周産期こころのケア外来」として産科で精神科医が外来を行うことになりました。周産期に精神的に不安定になる妊産婦を産科の中で診てもらえることになり、当院の周産期メンタルヘルス支援がさらに充実することになりました。今後も女性が安心して周産期を過ごすことができるよう努めていきたいです。

企画・発行：日本周産期メンタルヘルス学会 情報関連委員会

当学会では会員の皆様にとって有用な情報をニュースレターで取り上げていきます。
ご意見やご要望がありましたら事務局までお知らせください。